

あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。マタイ 6:27

現代医療は日進月歩で進歩しており、確かに平均寿命は延びたかもしれませんが、しかし、個々人、自分を含めた身近な人々が思いがけない病に冒されたり、報道で重病・難病で苦しむ小さな子や若い方々の話を聞いたりすると、人がいかに無力であるか、思い知らされます。

さらに、医療の進歩につれて様々な問題が生まれています。代理出産や卵子提供、選別出産など、生命の誕生に関する生殖医療の問題。これは生命の誕生を従来の自然な形ではなく、人工的にどれだけ関与していかかという問題であり、IPS細胞など再生医療の問題も関係してきます。また自然的生命の終期に関し、脳死した方から健康な臓器を、必要とされている方に移植してもいいのか、認知症が進展して、意識がなくなった方に、胃ろうなどの経管栄養補給をし続け、人工呼吸器を装着して、無理矢理いのちをつなげ、本人の意志を確かめるすべもなく、家族の負担だけが続いてゆくという終末期医療の問題、あるいは究極的には本人や家族等による安楽死の選択など、人生のはじめや、中程と同じく、人生の終わりにも、問題は絶えることがなく、人が「心配」しても、思い通りにならないことがほとんどです。

人間の生命はどこから来るのか？そして、生命とは何であるのか？本日はこの問題を考えてみます。

人間の誕生は、卵子に精子が結合して細胞分裂を開始させ、胎内で地球の数億年の生物の進化をなぞるように臓器が形成されてゆきます。しかし、肺呼吸が始まるのは、出生後にうぶ声をあげて自発呼吸が始まる時です。「愛あるいは意志選択の力は、知恵あるいは判別力と結合しない限り、人間の形を通しては何事もなしえません。これは心臓が意志選択力に相応することからもわかります。人の胎児は心臓に関しては生きていますが、肺に関しては生きていません。血液はまだ心臓から肺臓に流れて、呼吸を可能とせず、裂け目を通して心臓の左心室の中に流れ込みます。その結果、胎児は体のどの部分も動かすことができず、固く留まり、感覚器官が閉じられているため、何も感じません。」(神の愛と知恵 401. 3)

胎内では、生きてはいるが、暗闇の中において、人間としての活動も感覚もありません。

肉体の死は、現在の医学上では三つの兆候、すなわち呼吸の停止、心拍停止、瞳孔散大の症状が15分～30分続くことによって確認されます。呼吸が停止しても、心拍が停止していないわずかな時間がありますが、心臓の停止は、霊的な身体と自然的な肉体の相応が終了するときです。この相応が終わった後も、体の他の細胞は一部生きていますが、主要な肉体の働きが停止しているため、栄養が補給されず、老廃物も排出できず、時間の経過とともにすべての細胞が死滅してゆきます。

肉体の生命は心臓の鼓動から始まり、その終焉も心臓の停止で終わります。人が働くときも眠っているときも心臓は働き続けます。心筋は不随意筋で、人の意志とは関係なく働きます。その力は最も高い三界の天界に由来します(天界の秘義 9670-2 参照)。

生命の始動は心臓から始まりますが、私たちが、生命を実感できるのが、自らの意志による動作と、いわゆる五感で代表される感覚です。「視覚、聴覚、嗅覚、触覚から感じているのは、肉体ではなく、その霊です。そのため、霊が肉体を脱ぎ捨てても、肉体の時にあった感覚を保持し、それははるかに鋭敏です。・・・感覚なしには生命はなりたらず、生命の性質はまさにその感覚により決定されます。」(天界の秘義 4622 [3])。感覚の有無は、生命を実感できるかどうかです。感覚を失えば、もはや生きているとはいえない状態ですが、霊界に移れば、感覚はさらに鋭敏となります。ただし、感覚が本当に鋭敏となるのは、善い霊、天使に関していわれます、なぜなら、感覚は真理からではなく、善に由来するものであるからです(天界の秘義 4662 参照)。逆に悪霊や地獄の住人の心は、自己愛と世間愛に終始しているため、そこから錯覚し、様々な誤りや偽りを見るようになります。本物の感覚は、自己愛や世間愛が凝縮した悪からではなく、善から由来し、本物の善と真理は主のみから発します。

「霊の感覚は、霊的起源からきています、なぜなら太陽としての主から発する神的なものから存在するから

です。太陽としての主から発する神的なものは、靈的なものです。」(黙示録解説 926-2) 靈の感覚は、主、その太陽として発する天界の光、神的善と結びついた神的真理に源を持っています。

すなわち、生命は人の内にあるのではなく、外からやってきました。「人は独立して生きている、独自の生命がその内にあると信じることも錯覚です。」(天界の秘義 5084)

自己愛と世間愛から起こる感覚の迷妄は様々です。万物の源は自然である、死後の生命などない、魂はかけろろうのようなもの、結婚愛など存在せず情欲は自然のままがいい、善は積み重ねることによって功德となる等、感覚だけに頼ると、無数の錯覚が発します(天界の秘義 5084 参照)。全宇宙が創造されてその源を教える啓示によらず、自分に都合の良い、あるいは狭い世間に都合の良いことだけを感覚から導き出すからです。

その中でも、人の生命が自分のものであるかのような、きわめて大きな錯覚が起こるのはなぜでしょうか？それは主が私たちそれぞれの、ごくごくそばに存在されている、人に絶えず臨在されているからです。「生命が人の内にあり、まるで生命が自分のものであるかのような外観は、主が絶えず存在されること、主の神的愛、すなわち、主がご自身を人に結合させよう、人の中におられよう、人にご自分の生命を分かち合おう、と望まれていることから起こります。それが神的愛であるからです。それが絶え間なく、まるで連続しているため、人は生命が自分自身のものであるかのように思ってしまう。しかし人の中にはひとかけらの善、ひとかけらの真理もなく、それは上から来て、吹き込まれているものと知らなければなりません(黙示録解説 349-2)」。

生命は人の内には存在せず、上から絶えず流れてきています。何が流れ入ってきているのでしょうか？

「人間のあらゆる感覚、すなわち視覚、聴覚、嗅覚、味覚と触覚、この総ては人間の内に無く、流入によって引き起こされ、造られます。人間の内には、ただ有機的な受容の形があり、流入によってそこに適合したのものがあるようになるまで、何の感覚もありません。」(黙示録解説 349) 外的感覚だけではなく、「思考や情愛に属する感覚の内的組織についても同じように真です。自然界からの流入を受ける感覚の外的組織と同じように、靈界から流入を受けます。」

「ただ一つの生命の源泉があり、総ての生命はそこから絶え間なく流れ込」んでいます。生命の源泉は、主お一人であり、主の愛と知恵が絶えず流入し、天使や靈、人間は、それを受ける器であり、その器は意志と知性の二つです。

「生命自体は善と真理の内であって、ほかのどこにもありません。愛の善の人の受け皿は意志であり、信仰の真理の受け皿は知性です。また善を意志することも、真理を信じることも人の業ではありません。人の全生命には二つの機能があり、これらの他には生命は存在しません。」(同上)

人は器にしかすぎず、感覚を含めて主が人を生かし続けています。私たちが絶え間なく感じている映像、音、香り、感触、味、これらすべてはことごとく、主が分け与えようとしているもののほんの一部です。靈的にも情愛や思考、これもすべて外から入ってきており、それは主を起源とするもの、地獄を起源とするものがあり、どちらを選ぶか、その自由さえも、靈的均衡として、主が与えられています。本物の知恵を得るなら、「それ自体から存在し存続するものは何一つなく、それに先立つものからのみ存在します。また、最初のものから継続的な秩序を重ねることができて初めて、その先立つものが在し存続することができます。このようにして、生命そのものは、それを観察するなら、ご自身が生命であるものからのみ存在すること」(同上)がわかるようになるはずです。

これらを心底理解することができるなら、今までの考えの一部が錯覚であることがわかります。たとえば、輪廻転生という概念は、自分自身が生命を持っているという偽りからでなければ発生しません。この概念には、生命とは何か？という基本的なものがなく、透明なふわふわした不定形のものが、様々な色彩にたとえられる記憶に染まりながら、浮かんで消え、浮かんで消え、決して脱しきれない宿命として永遠に漂っているようなあやふやなものにしかたどり着けません。これは身分社会を形成し、あるいはなんらかの不幸や、たまたまの幸運などの現状を固定して説明するには便利な概念ですが、最終的には大多数の人を絶望に導き、何ら前向きなものを産み出しません。ご自分のものすべてを与えようとされる神の無限な愛に比べ

ば、とるに足らない、ほんのちっぽけな幻想にしかすぎません。

生命は、自然的なものを基礎にして誕生し、呼吸の開始によって霊的なものが始まり、経験や知識を学び、主と地獄からの流入を自由に選択してゆくことによって育ち、自然的な肉体が終わっても、意志と知性という霊的なものは決して失われることなく、主からの生命が絶え間なく流れ入って、それを受けることで続いてゆきます。主の愛は、その場限りのものでなく、主の知恵も有限なものではないので、流入される生命はどんな時にも絶えることなく、人の受容に応じて永遠に育ってゆきます。はじめから生命がふわふわ浮いて漂っているわけではありません。自然的なものが基礎、始点とならなければ、創造の基礎である自然的世界は意義を失い、ただ私たちに迷いを与える牢獄にしかすぎなくなります。人は、この世に誕生し、学び選択しながら育ち、永遠に意志と知性の中に、主からの善と真理を受け入れてゆきます。

生殖医療や終末期医療についてはどうでしょうか？

十戒には「殺すなかれ」という戒めが厳としてあります。「この『殺すなかれ』という戒めには、・・・人を殺してはならない、致命的な傷害を与え、肉体を損ねてはならない、を意味するとともに、その名や名誉に致命的な害を与えてはならないことも意味されます。・・・より大きな意味では、殺人には敵意、嫌悪、復讐を含みます。・・・霊的意味では、人の魂を殺し、滅ぼしてしまうこと・・・天的意味では、主に一方的な怒りを発し、憎悪を燃やし、主の御名を消し去ってはならない」(真のキリスト教 309-311) ことが意味されています。

簡単に結論を導き出すことは禁物ですが、終末期医療では人間の尊厳ということが言われ、本人が肉体の生命よりも、名誉や人としての尊厳を大切にすることは、そんな選択肢もあるかもしれません。また本人の明確な意志がなくとも、本人の意志が十分推測でき、それが敵意や嫌悪、自分たちの都合から出たもので無い限り、そして本物の生命を大切にしようとする限りにおいて、他の選択肢も可能な場合があるかもしれません。これは選択出産などにも当てはまる可能性があります。慎重の上に慎重を期して悩むべきです。短絡的な結論こそ避けるべきです。物質的・この世だけの問題だけではなく、自分の都合を離れて、相手の気持ちから、そして主の御心を求めて悩んでこそ、個別のこれらの問題に光がさしてきます。

生命の問題、その本質についても同じことがいえます。空間・時間あらゆる次元を含むこの全世界、全宇宙に唯一存在されるお方、主は、その本質の愛と知恵は、生命そのものであり、実体そのものです。物質世界や、錯覚に染まってしまっている私たちには、主の愛と知恵のみが存在している「実体」であるといわれても、納得できないかもしれません。

「これが光の前に明らかにならないのは多くの理由があります。その一つは、まず外観によって人の心は理解を形作ってしまうことであり、この外観を取り払うためには、原因を丹念に探求するしかありません。原因が深く隠されていたなら、長い時間をかけて霊的光の中に、自分の判断力を置かなければ、その原因を探ることができません。しかし世の光が引き戻そうとするので、それを長い時間保つことは簡単ではありません。」(神の愛と知恵 40)

その中で、自然的、世の光を離れて、天界の光の中で自分を保つことで、生命を含めてあらゆるものが与えられます。

「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」(マタイ 6:33) アーメン



理を信じることも人のものではありません。人の全生命には二つの機能があり、これらの他には生命は存在しません。この二つの機能ならびに、人の全生命は、人の内にはなく、流れ入ることが明らかです。悪と偽り、あるいは悪の意志と愛、そして偽りの知性と信仰は、流入によって人にうまれます。ただしこの流入は地獄からです。なぜなら人には選択の自由、すなわち、善と真理を主から受けるか、悪と偽りを地獄から受けるかの自由があり、これは改良のためにこの自由のうちに保たれています。それは、人は天界と地獄の間に、すなわち霊的均衡、つまり自由のうちに置かれているからです。この自由自体も人の内にはなく、生命と共になって流れ入ってきます。